

読書離れの時代の英語の教室において如何に文学的効用を活用するのか ——大学英語におけるアメリカン・オルタナティヴ・ポエトリーの 教育的効用の考察

河田 英介

How Do We Utilize Literary Effects in Japanese College Classrooms of English Acquisition in the Trend Away from Book Reading?: A Discussion on the Merit of Reading Alternative American Poetry in College English

Eisuke Kawada

Abstract

How do we utilize literary works and their effects in Japanese college classrooms of English acquisition especially when the non-reading public is growing unprecedentedly larger partly due to the rampant advancement of modern high-technology? This bold and naïve query is the main concern to which this essay undertakes to respond. This is urgent and necessary not only because the culture the nation maintains through book reading directly affects the future of a nation in many ways, but also because the irresistible trend away from book reading in modern Japan and its strong trend of pragmatic pedagogy that excludes effects that literary works endow to English acquisition classrooms in colleges, are depriving one of the most irreplaceable channels that have been cultivating education for centuries.

This essay begins by confirming how Japanese literary scholars of English view the current trend of pedagogy, and that statistics on the trend of book reading unexpectedly indicate how students crave for the positive effects literary texts generate. Then, by arguing how literary texts contribute to expanding one's literary imagination to affirm Others and their worlds, it demonstrates how certain works from alternative American poetry and their respective in-class worksheets may serve as new ways to cultivate education.

I. 序 ¹

現代日本が抱える様々な問題の中でもアカデミアが積極的に関わるべき問題の一つとして、人々の読書離れの傾向があげられるだろう。今日の高度技術の革新は、人々の生活様式を変化させる過程で、かつて本が情報取得のための主要媒体だった時代に比べ、確実に人々を読書行為から遠ざけつつある。しかし読書に代わる何等かの行為によって、読書行為がもたらしてきた教養の涵養——高度な言語観や言語的感受性の構築及び言語的思考の発展といった諸効果

——がもたらされれば、そうした傾向もさほど問題ではないかもしれない。だが読書行為に取って代わる同様の諸効果を涵養しうる代替當為を未だ獲得できていないからこそ、この読書離れの傾向は問われるべき社会的課題となっている。これが喫緊課題であるのは、究極的に言えば、読み手の教養を高めることが、国の知的基盤の維持・発展、そして国民の自由・生命・財産への安全保障を高めることでもあるにも関わらず、教養を涵養する読書という従来の方法がハイテク技術の発展に伴って地崩れを起こしはじめているためである。

こうした趨勢の中で、本論の最大関心事である大学英語²は、どのように時代に対応していくことで自らに課せられた任務を遂行していくべきなのだろうか。本論はこのような途方もなく大きな問いに対して、文学系英語教員の立場から、時代の流れを捉えた時に、どのような応答が可能であるのかを考えることが目的である。傍若無人にも見えるこの企図は試論の域を超えることはないかもしれない。しかし英語教員各々がこうした大きな問いに対して、自らの立脚する学術的専門領域の枠組みとその作法を超えて、クリエイティブな応答方法を考え、提案し、発信することは、調査・解明を目的とする研究論文と等しく重要な学術的意義を果たすものであり、たとえ途上段階にあったとしても、自らの応答を公表することには大きな意義があると本論は考えている。

このような狙いから本論は、その性質から、現在の「英語教育」の現状や「諸指導法の問題」を分析・実証化することが目的ではない。さらに本論で提示するソリューションの効果を測定するデータやその教育評価を実証することは将来的構想に含むこととする。そのため、これまで議論されてきた問題の確認と考察、そしてそれに対する提案を目的とする本論においては、大学の英語の教育現場に関する諸データの実証化とその分析が射程目標となっていない。さらに、学習指導要領や教職課程コア・カリキュラムのシステムとその内容の変化を取り上げて、それがどのようなものであるかを解釈することや、そのシステムが孕む問題を根拠に議論を進めることも、本論の目的ではない。むしろ日本英文学会という限定された言説空間においてこれまで歴史的に唱えられてきた大学英語の抱える問題を一つのれっきとした歴史的根拠と捉え、その前提の上で、この問題に対して、大学の英語の教室においてどのような個別応答が可能であるのかを独自に考え、提案することに留めている。つまり本論は、これまで文学系英語教員によって歴史的議論されてきた大学英語の問題を一つの根拠に据え置き、そこからどのようにその問題を把握し、発展させていくのか、さらにそれに対してどのような戦略が可能であるのかを独自に考え、試案として提出することを目的にしている。³

本論の構成は以下の通りである。

まず初めに、第Ⅱ節においては、文学系英語教員がどのように現在の大学英語の教育の動向を捉え、どのような問題を感じているのかを確認することを通して、その教員達が英語の教室の中で何が出来るのか、またどのような務めを果たせるのかを考察する。

続いて第Ⅲ節では、大学英語の教育にも大きく影響する昨今の読書離れの一般的傾向とその特性を確かめる。平成 27 年度『「国語に関する世論調査」の結果の概要』（文化庁、平成 28 年）からは、一般的生活において人々がどのようなメディアから情報を得ているのか、そして紙媒体を通じた文字情報の取得の割合を確認する。さらに第二の資料である平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」（株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月）からは、昨今の本離れの傾向が顕著である中でも、これから大学教育を受ける高校生世代がその表

層の実態とは裏腹に、本を読むことに「物語などを楽しむことができる」という効果を見いだしているという驚くべき事実を確認し、そこに本論の問いへのソリューションの可能性を見いだす。

第IV節は、第III節の統計が映し出す状況がどのような教育方法を要請するものなのかを逆算的に導き出すことを目的としている。ここにおいては、高校生達が見いだしている「物語の効用」を如何に効果的に英語の教室において活用しうるのかを、アメリカ脱構築一派のヒリス・ミラー J. Hillis Miller と原田範行氏の文学教育論を手掛かりに考察する。そこにおいては、第一に、文学が読み手を効果的に仮想現実連れだしうる呪文の役割をしていること、第二に、文学作品がもたらす「違和感」という感覚こそが、これから国際労働市場に旅立つ学生にとって必要とされる国際感覚を身に着けるための一つの呪文になりうることを議論する。最終的に、その呪文が新たに大学英語に必要とされる重要な効果をもたらすことを議論する。

第V節においては、第IV節の議論を根拠に、大学英語の教室の中で——主に大学一年生と二年生を母集団として想定する時——、実際にどのようなスキームを通して大学英語の目標を果たしうるのかを、独自のテキスト選びとワーク・シートの作成例を通してコロラリーとして提案する。この方法論の独自性は、テキスト選びとその活用方法にある。これまでの大学英語の現場において、キャンオンと位置付けられる古典的な英詩がテキストとして用いられてきた事例は想像に難しくないが、本論においてはアメリカン・オルタナティブ・ポエトリーと呼ぶべき、これまでアカデミア文化圏の中では決して扱われて来なかった非＝正典的文学作品を選定している。これらのテキストは単に文字数が非常に少ないという利便性だけでなく、高度な教養が未だ確立されていない多感な大学生でも共感・共有しやすいテーマを元にして詠われる既存体制に反抗する感情豊かな前衛的詩作であり、文学テキストがもたらす違和感を最も効果的に教室の中に運び入れてくれるものである。そしてそれが読書離れの時代に効果的に教養を涵養する教材となりうることを説明する。またこのテキストは、これまで教養英語の範疇とされてきた文学作品——主に小説というジャンル——を活用して実践される「多読」という学習方法を一旦宙づりにし、より短い英語文学テキストである英詩を「精読」することを通して、読書離れが進む時代の中にあっても多読がもたらしてきた「読む・書く・聞く・話す」の四技能の効果をもたらしうることを唱える。ここにおいてはそうしたテキストの選定以外に、それぞれのテキストに個別に対応するワーク・シートを用意し、それらの活用法——理解に基づいた文芸創作的アプローチ等——も同時に紹介することで、より具体的に本論が考えるソリューションを可視化する狙いがある。

本稿は以上の筋道から、文学系教員の観点から大学英語の目標をより効果的に果たすための独自の取り組みを示す。

II. 日本英文学会で議論されてきた大学英語の課題とその考察

グローバル労働市場の急速な拡大と発展とともに、日本の英語教育は、旧来の読む・聞く・話す・書くという「四技能分離型」英語教育から、より実践的技能的習得を目指した「四技能統合型」教育へと本格的に転換しようとしている。昨今の大学教員公募においても「英語で授

業可能であること」という項目がほぼ必須となっている状況からも、この二十年の間に、大学の英語教育は、旧来の<理解>を中心とした教養英語から、<実践>を主眼とする技能英語へと姿を変えつつあることは紛れもない事実である。しかし、この転換はプラグマティックな観点からは評価されるべきものでありながら、二〇〇〇年以降の日本英文学会の英語教育シンポジウムで盛んに議論されてきたように、大学英語の教育に携わる多くの文学研究者は、今なおこの方向転換による実践性への過度な集中が引き起こす弊害を強く訴えている。

二〇一七年春に研究社から出版された『教室の英文学』日本英文学会（関東支部）編には、これまでのそうした議論が結実させられており、いよいよ英文学者達の大学英語の教育論の真価が問われようとしている。その書の序論で佐々木徹氏はこれまでのシンポジウムの議論の果実を次のようにまとめている。

英語はもっぱら道具とみなされ、授業はその道具を使いこなすための技術を習得する場となっているが、質の高いテキスト、すなわち豊かな感性や情緒をはぐくむ文学作品を読んで『人間力』を高めるのは必要不可欠なことだという趣旨の意見が出されていた。まったく同感である。(2；下線部筆者)

これは、文学的効用が技術的な英語教育の合理性に回収されていく中で、従来の文学教育の果たしてきた教養的効用が失われつつある事実に対する文学者達の危機感を率直に表している。さらに同書において斎藤兆史氏は、次のように訴えている。

「私は、文学テキストがもっとも高度な言語構造物であるがゆえに、それを用いない言語教育はあり得ず、日本における英文学研究と英語教育とは本来有機的に関連しているべきものだと考える立場に立つ」(30；下線部筆者)

斎藤氏の主張はつまり、中学・高校の英語教育の価値観を基軸とした、英文科批判を根拠とするある種のプラグマティズムによって、大学英語が本来維持していた英文学研究と英語教育の有機性が破壊されてしまったことに対する是非を問う。本稿は両氏が唱える文学教育の効用が果たすべき役割の重要性に同意するものである。しかしプラグマティックな英語教育の共同体からすれば、一般教養の英語教育において文学作品を用いた『人間力』を涵養するという一見すると抽象的にも見える企図は、簡単に歓迎できるものではないはずである。

あらためて問われるべきは、このような英語文学を通した大学英語を復活させようとする時に浮上する諸々の新たな問題だろう。つまりそのプロジェクトが導入されてから、広く定着するまでにかかる時間、教員配置やその資格といった問題、さらに、実体的な成果を本当に出せるのか、といった諸問題がある。従来の文学部や人文社会系がますます解体縮小されていく昨今、新たな教育課程が具体的な成果をすぐに提出することは難しい。また、大学が人材を確保することがますます困難になっていく中で、時間もあまり与えられないだろう。そして最も困難な問題は、大学英語において文学的効用を重んじた教育が、「人間力」そして高度な認識力とコミュニケーション力を十分に涵養しようという客観的かつ実体的成果を急いで示さなければ

ば、また何年もしないうちに英語文学を用いた文学的効用を取り入れようとする大学英語のプロジェクトは、再びプラグマティックな合理性に回収されていってしまう、というものである。

また、たとえあらたなプログラムが導入されても、大学英語の教育における文学教育の効用を明白に示さなければ、英語文学という教材は、江戸時代に『源氏物語』というテキストが置かれていた境遇と同じ運命を辿ってしまう可能性を秘めている。江戸時代中期に活躍した国学者、本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』(1799)において、『源氏物語』の美的効果を理解することが「もののあはれをしること」を学ぶことであり、それを身につける過程で備わる「うたごころ」の感覚こそが高度な教養と認識を涵養すると説いた。それは、『源氏物語』がその当時、教養を涵養するためのテキストとしてではなく、その第一級の文学的奥深さとは裏腹に、日本語の習得するための価値のみが見いだされ、言葉を学習するためのテキストとしてのみ使用されていたためだ。この前例に鑑みればつまり、大学英語における文学テキストの効用がはっきりと示されなければ、せつかくの教養を涵養するための英語文学テキストも、やがては「英語文学」という名を借りた、英語技能を高めるためだけの羊頭狗肉な教材となってしまう危険性を秘めているということ肝に銘じておく必要がある。

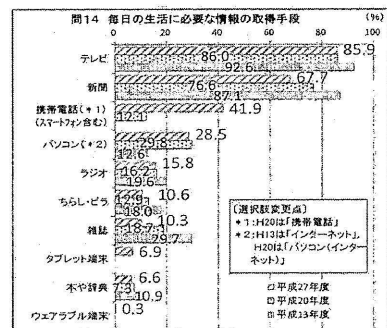
教養英語の効用を推進しようとする英語文学系教員はもはや、英語教育現場における文学的教育に対する過小評価に徹底抗戦している時間はあまりない。著書『教室の英文学』の数々の論文が例示しているように、昨今においては、教員各々が自らの大学英語の中の文学教育論を構築・実践し、急ぎ足でその成果を実証せねばならない時期に差し掛かっている。さらに大学英語における文学教育一派が掲げる「人間力」を育むという目標が、グローバル化に対応したプラグマティックな効果も十分に持ちうることを示す実体的成果も提出しなければならないだろう。要するに、文学的効用を重んじる教育方法が、実践ツールとしての文学的想像力やそれを根拠とした行動力、と呼ぶべき諸能力を涵養するということを通して、現在ある英語教育のメソッドとハイブリッドな様式で、大学英語の到達目標をより高い次元で達成しうることを示していかなければならないのである。

以下においては、こうした目標をどのように実現しうるのかを愚直に考察してみたい。

Ⅲ. 読書離れの突破口を探る——「物語を楽しむ」という希望の発見

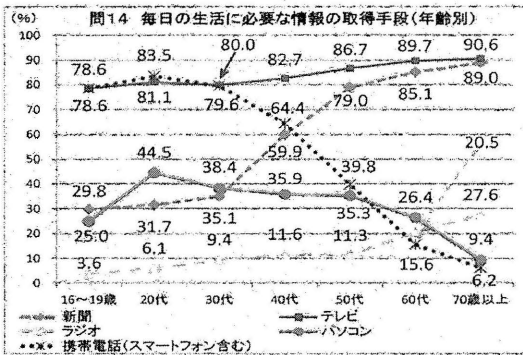
目標を実現しうる効果的な方法論を探るためにも、大学英語の教育とは一見無関係とも思われる、近年の読書に関する調査結果確認したい。右の<図1>⁴⁾は平成28年に公表された文化庁による「国語に関する世論調査」である。この調査は、全国の16歳以上の男女に対して、日常生活で必要な情報をどこから得ているか、三つまで選んだ結果を示している。これが示すのは、平成27年においては、多くの日本人が日常生活を営む上で、殆どの情報をテレビ(89.5%)か新聞(67.7%)、あるいは携帯

<図1>



(41.9%)、そしてパソコン (28.5%) から得ている事実が見て取れる。そして「本や辞典 (6.6%)」は下から二位である。これらの特徴に注目すれば、現代の日常生活において本の占める位置は主要メディアに比べ圧倒的に低い。

<図2>



においては新聞がその半分以下(31.7%)にまで落ちている。そして「本の需要」は、新聞の半減した率から推察すれば先ほどの(6.6%)の半分の(3.3%台)まで下がっている可能性も浮上してくる。

多くの媒体の登場によって現代人が日常において本と向き合う時間は激減していることは紛れもない事実である。しかし、本論の最大関心事である文学作品に希望が無い訳ではない。右の<図3>⁶の平成26年度「高校生の読書に関する意識等調査報告書」の「読書が好きかについての意識」調査では以下のような不思議な数値を示していることに驚かざるを得ない。読書が「好きでない」と答えている割合は12.7%のみである。さらに読書が「とても好き」が17.4%、そして「わりと好き」が46.4%である。

これはつまり、全国の16歳以上の人々の間で日常生活において圧倒的な本離れが進行している中でも、合計64%の高校生が読書を「好き」の範疇で答えているのである。

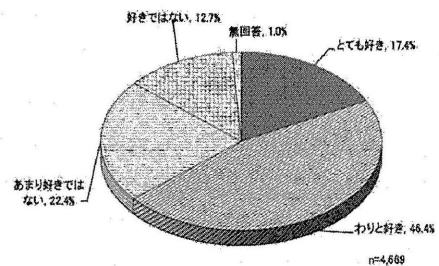
さらに驚くべきは、右の<図4>⁷における「読書が好きかについての高校生・保護者の回答の比較」調査の統計である。読書が「とても好き」と答えた高校生が17.6%に比べ、その保護者達は14.5%を示している。つまり、読書が「とても好き」と答えた高校生は保護者の世代よりも多い点に、読書への希望が残っているとと言える。

前掲の文化庁の調査の<図1>では日常生活における「本・辞書」の項目は全体情報源の中の6.5%の需要しか占めていなかったにも関わらず、その中で現在の高校生たちは親の世代にもまして、読書に興味があることが浮彫となっている。

次に、本稿の問題に直接かかわってくる日本の高校生・大学生の場合はどうだろうか。同様の統計調査から左にある<図2>⁵の横軸の「16~19歳」と「20代」を見ると、彼らは日々を営む上でほぼ、スマートフォンを含む携帯電話(83.5%)、テレビ(81.1%)、パソコン(44.5%)、そして新聞(31.7%)を通して情報を得ていることがわかる。先ほどの資料1の新聞(67.7%)というポイントは全世代を通じた結果だったが、この世代に

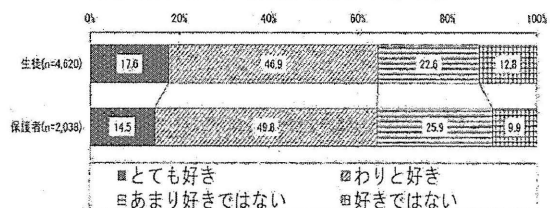
<図3>

読書が好きかについての意識



<図4>

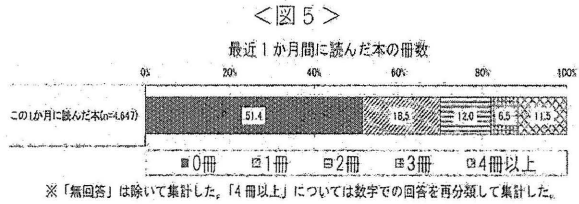
読書が好きかについて高校生・保護者の回答の比較



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。

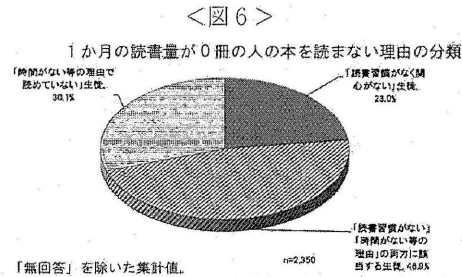
しかしここで、悲嘆すべき統計がある。

＜図5＞⁸は「最近一か月間に読んだ本の冊数」の調査である。先ほどの「読書が好きかについての意識」の調査では、64%もの高校生が「読書が好き」と答えていたにも関わらず、右の統計が示すのは、51.4%の高校生が一か月間に一冊も読んでおらず、



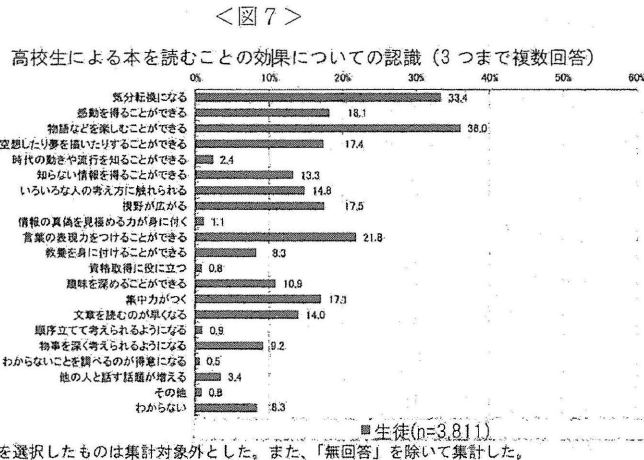
かろうじて20%だけがなんとか一冊を読んでいるという実態である。つまり、「多くの高校生が読書が好きにも関わらず、多くが本を殆ど読んでいない」という奇妙な捻じれが発生している事実が窺える。これは＜図1＞と＜図2＞における日常生活の情報を得る際の「本・辞典6.5%」の傾向と一致するものであり、一日二十四時間の中で本を手取る割合が低いことは読書時間もまた平行して低い事実を示している。

では彼らはなぜこれほどまでに本を手取らず、なお且つ読書しないのか。以下の＜図6＞⁹の資料である「一か月の読書量が0冊の人の本を読まない理由の分類」の統計がその問題の本質を示してくれる。この統計は23%が「読書の習慣がなく関心がない」、46.9%が「読書習慣がない」・「時間がない等の理由」を示し、最後に30.1%が「時間がない等の理由で読めていない」という割合を示している。



つまり、一か月に一冊も本を読まない生徒の約七割の集団が、そもそも本を「読む習慣」がないという事実を確認できるはずである。

しかしこうした酷い状況においても、読書行為にはまだ一縷の希望が残っていると云える。以下の＜図7＞¹⁰の資料は、高校生に「本を読むことの効果についての認識」を質問した調査である。驚くべきは、21項目の中で最も大きな割合で一位となったのは、36%を獲得した「物語などを楽しむことができる」という項目である。ここに、高校生達は物語というものがもつ効果に何等かの期待をしている事実が窺える。過半数以上の高校生



の平均読書量が月一冊以下の中、読書の最大効果が「物語を楽しむことである」ことを高校生達が認識している事実は、喜ぶべき超越的な捻じれと言わざるを得ないだろう。さらに、

三位に位置する「言葉の表現力をつけることができる」(21.8%)、四位の「感動を得ることができる」(18.1%)という高順位項目が意味するのは、多くの高校生が読書行為を、楽しいものであり、かつ役に立つものだと感覚的に期待しているという事実である。

こうした読書に関する調査が私達に伝えているのは、大学英語の教育における文学的効用を取り入れるプロジェクトの前方には、学生達の本離れと、読書離れという高い壁が存在することである。しかしもう一方で統計が示す、高校生たちの「物語などを楽しむことができる」という認識は、その高い壁を乗り越える可能性を十分に秘めていることを客観的に示している。つまり、文学テキストを通して「物語を味わう愉しみ」を広めることこそが、彼らの本離れと読書離れを食い止める突破口となりうると言えよう。この突破口を通して読書傾向を高めていくことは、「もののあはれをしること」を積極的に涵養することを可能にし、大学英語の教育目標をさらに高い次元で達成させる可能性を高めるはずである。

IV. 物語の効用をどのように活用するのか——物語は文学教育への呪文

高校生達が「物語の秘める力に魅了されている」事実は、大学英語において文学的効用を取り入れる方法論に新たな光を与えてくれるものである。では、彼らが感覚として得ている物語の秘める力とは一体全体どのようなものなのかを見てみよう。1980年代の米国で活躍したアメリカ脱構築学派(イェール学派)のJ. Hillis Millerは著書『文学について』(2002)において次のような叙述している。

文学作品の冒頭の文章は私には特別な力をもつ。その文章は、その作品の虚構領域への扉の掟を開ける「開けゴマ」という呪文である。わずか数語読むだけで、私は信じる者、先を見る者となる。私は魔法にかけられた、新しいバーチャル・リアリティの目撃者となる。もっと正確に言えば、私はそのリアリティの内側で肉体を離脱した観察者となるのである(29)。

ここにおいてミラーは、物語というものが、たったのいくつかの語彙でもって読者をその仮想現実の世界に深く引き込みうるのだと述べている。それが成功する時、読者は「肉体を離脱した(disembodied)」(29)身となることで、物語のキャラクター達の異空間へと移動し、共存在的傍観者として楽しむという論理である。ミラーが「文学作品とは新しい世界を開く呪文(abracadabra)」(23-24)であると述べているように、文学作品は読者を新しい世界へと連れ出してくれる呪文の役割を果たすのである。

しかし先ほどの一連の統計に鑑みて、ここで疑問となるのは、文学作品が呪文として機能することで人間の潜在的な空想能力が引き出されるのであれば、なぜ物語を楽しむことを感覚的に理解している多くの高校生達や16歳以上の男女が、一般的に本や文学作品を手にとっていないのかということである。一般的に考えて、「もののあはれをしること」を知っている読み手は、手に取った文学作品が自らの現実からは遠い仮想現実だとしても、その教養を

もって簡単に作品世界へと空間移動し、ミラーの言う「肉体離脱した観察者」に変身しうる。そのために、彼らは楽しむために本を手取る。しかし、そういった能力を可能にする教養をこれから吸収しなければならない段階の学生達にとってそれはとても困難なことなのである。それにもかかわらず彼らは何らかの理由で物語の愉しみを期待しているのであり、その可能性を待ちわびている。つまり、学生達が本を手取らない理由は、〈図6〉が示していたように、愉しみを待ちわびているにも関わらず、「読書の習慣がない」ということに尽きる。さらに彼らが本を手にしなない理由は、本に触れる実際の機会がない、さらには、物語を楽しめる文学テキストを紹介される機会がない可能性を示しているのではないか。¹¹

読書の習慣を身につけさせることは簡単なことではない。たとえば読書を促そうとして、あまりに分かりやすい作品を持ち込んでしまうと、その仮想現実が彼らの日常の現実と類似するあまり、彼らが仮想現実の異空間に移動することが難しくなり、読書への関心はそもそも高まらないだろう。ではどのように対応することが可能なのだろうか。「わずか教語読むだけで」仮想現実に入り着けると語るミラーを参考にすれば、教員は簡潔且つ平易な英語で書かれたテキストでありながら、多くの学生にとって明らかに異質な空間が広がっているテキストを選定することが重要と言える。要するに、物語を楽しみたいのに本を読まない多くの学生が必要としているのは、従来の大学教育の中で与えられてきた文学テキストというよりも、さらに強力な呪文である。その強力な呪文こそ、彼らが本を手に取り読書に向かわせる要因になるはずである。

ここで本論は、大学英語においては文学テキストを用いる場合、従来の権威的テキストではなく、むしろ違和感のある作品——〈ちょっとへん〉な作品——を戦略的に選ぶことが肝心であることを主張する。つまり、高度な教養を必要とする正統的な文学作品としての呪文ではなく、文学を楽しむための〈初期設定を目的とした導入用の呪文〉を用意することが必要なのである。違和感がありながらも圧倒的な効果をもつ呪文を初期に導入することで、まだ読書習慣のない学生達を無事に異空間に連れていく——〈もっていく〉——ことが可能になる。この戦略が有用であるのは、〈ちょっとへん〉な作品を通して、ミラーの言う「肉体離脱」の感覚を初期段階で経験することが、その先にある第一級の文学作品への扉となりえるためである。

初期導入とはいえ、〈ちょっとへん〉な呪文を使って学生達を異空間へと〈もっていく〉ことに戸惑いを感じる大学教員も多々いることは予想に難しくない。だが、そうしたある種のテキストに対する教員自身が感じる〈違和感〉こそが、現代の学生達の本や——文学離れを必然的に含む——読書離れを招く原因にもなりうることも忘れてはならないだろう。例えば一般的に考えて、日本の大学一年生にモダニズム作家 Ezra Pound の詩——最高難度の言語処理能力がなければ十分に楽しむことができない作家のテキスト——をいきなり読ませることは、アメリカのパルプ小説の代表作家であるチャールズ・ブコフスキーの小説を読ませることに比べ、どれほど学生達の本・読書離れを招きやすいかは容易に想像がつく。逆に、ブコフスキーを楽しめない学生達がどれくらいいるだろうか。つまり、〈ちょっとへん〉な呪文を通して学生達を異空間へと一気に〈もっていく〉ことには肯定的な効果もたらされるのである。これは、現在の学生世代の本、読書離れを食い止める効果をもつだけでなく、大学英語において文学的効用を活用する教育の目標をより達成しやすくしてくれるものである。つまり「ちょっとへ

んな」呪文が出発点であったにせよ、それを活用することは、読者層の回復、他者との共存のための異文化理解、他者とのコミュニケーション、他者への弁え等、多くの実践的ツールとしての文学的な想像力や行動力を十分に育むことを可能にするのである。

『教室の英文学』において原田範行氏は文学体験における「違和感」というものがもつ重要性を次のように説いている。

違和感こそ、国際社会への理解を深める第一歩にほかならない。それならば、地理や歴史を学ばばよい、という考えもあろうが、知識としてそれらが伝授されるのではなく、学生が、読者として、テキストと深く絡み合いつつ、個々にこの違和感を体験し、体験することで自らの考えや接し方を模索するプロセスを、文学テキストの読解は保障するものなのである（26-27；下線部筆者）。

つまり本論で言えば、〈ちょっとへん〉な作品が可能にする違和感たっぷりの文学体験を積み重ねることこそが、グローバルな労働市場でこれから格闘していかねばならない学生達が身につけるべき実践的ツールとしての文学的な想像力と行動力を涵養することにつながるのである。文学的想像力は、異文化との高度なコミュニケーションを可能にする実践的かつ行動的なツールなのであり、さらに、大学英語の教育の目標——つまり外国語を通した異文化コミュニケーション——をより効果的に高い次元で果たしてくれる貴重な教養なのである。

V. 〈ちょっとへん〉な作品で〈もっていく〉——共感と違和感を味わう

ではさっそく、どのような作品が初期導入として有用なのか。本論が考える多くある候補の中から、いくつか紹介してみたい。あまりに突飛すぎると、〈だいぶへん〉なものとなり、初期導入が失敗する恐れもあることから、学生達が共鳴しやすく、且つ「違和感」がうまく混在している作品が有効と思われる。最も消化しやすいのは、短い詩や短編である。¹²

第一の候補はジャック・ケルアック Jack Kerouac の俳句である。

Missing a kick
at the icebox door
It closed anyway (71)

このやけに短いケルアックの詩は一見とても解りやすいが、英詩を読んだことのない学生からすれば、「おや？主語はどこだ、動詞はどこだ、誰が語っているのだろうか？」と違和感をもたずである。しかし中学生レベルの語彙力でも読むことができ、しかもシンプルなりズムの三行の俳句を通して、情景や時間の感覚が見事に描かれていることから、中・長編を苦手とする学生にはかっこうの呪文となりえるだろう。まずここでは Text Identification、事実を認識する読みのレベルで、足のイメージ、開閉する冷蔵庫の扉、足でその扉を蹴ろうとして空振りし

たこと、そして扉が勝手に閉じたこと、の事実を容易に正確に拾うことができるだろう。また、解釈のレベルでも、icebox という季語の意味から、このストーリーの季節を分析したり、二行目から三行目における時制の変化に注目し、これがわずか3~4秒の間のストーリーであることを認識でき、足を使ったことから icebox の扉がおそらくは低い位置にあったと想像することも、あるいは anyway という語り手の表現から語り手自身がこの一部始終を滑稽に感じていたことなど、比較的簡単且つ短時間に解釈の実践を体験できる訳である。しかも俳句を読みなれた学生ならば、これが俳句形式で書かれた英詩であることにも気づく。そしてこれが、日本の俳句のパロディであることに気付いた時、学生達は、これが日本的「間の感覚」を利用した滑稽さを写しだしている作品であることを知るだろう。さらに、これが英語で書かれていることから、西洋という文脈も取り入れた間文化的な俳句であることにも気づくだろう。さらに English-Only class のクラスの教材としては、このような俳句がもつ「間」という余白をめぐって、英語俳句の解釈を議論することは非常に有意義である。学生達が審美的な感覚を発動させながら、何かを想像し、他者を説得しようとする実践は、教育的効果が高い。

では授業において、どのようにこのテキストを扱えるかを考察してみたい。例えば、本論執筆作成による以下のようなサンプル・ワークシートを検討してみる。

Sample Work Sheet 1

< Reading Question >: Identifying the text

1. List up whatever images that you sense from the poem.

Example: (icebox)

- a. (body) b. (door) c. (closing door) d. (foot)
 e. (motion of kicking) d. (someone with an ice in his hands) f. ()

2. What did the narrator wish to do? The narrator wanted to ().

3. How did the door close? The door closed ()().

< Interpretive Question >: Discuss the question

4. In which season is this taking place? (This scene is . . . because . . .)

5. What is the possible time length of this scene? (The possible time length of this scene is . . .because . . .)

6. What does the narrator feel about this scene? (He feels that . . .because . . .)

7. Why did the narrator try to kick the icebox door? (He kicked the . . . because . . .)

8. What will the narrator do after this scene? (He will probably . . . because . . .)

< Assignment >:

Write a Haiku in English by imitating the format.

(Eisuke Kawada, 2017)

例えば、1～3のような質問を用意し、Text Identification としての精読を確実に行うことで、事実関係に関するある程度の一致見解を作ることができる。それを元に、その後、質問4～7のように、構文ガイドのついた解釈問題を用意し、簡単な英作文の作業をしてもらう。そしてそれを学生同士で交換し、お互いに伝わる英語が書けているかを確かめ合うことは英語表現の学習に効果的だろう。さらに、全員がある程度解釈を用意できたところで、ディスカッション・グループと司会進行役を決め、その後に司会者に間接的にディスカッション内容を報告してもらうことも可能である。そして四技能統合型の極みとして、最終的に「英語で俳句を書く」という課題を出すことで、学生達はその後さらに深く詩を精読しなくてはならなくなる。四技能統合型の授業であっても、テキストの理解から「うたごころ」が少しでも理解できるように指導するのが理想だろう。

では他の候補となりうるテキストも見てみよう。これはウィリアム・カーロス・ウィリアムズがビート詩人の中で最も評価したハロルド・ノース Harold Norse の詩である。

I'm not a man. I can't earn a living, buy new things for my family.

I have acne and a small peter.

I'm not a man. I don't like football, boxing and cars.

I like to express my feelings. I even like to put an arm
around my friend's shoulder.

I'm not a man. I won't play the role assigned to me—the role created by Madison Avenue,
Playboy, Hollywood and Oliver Cromwell.

Television does not dictate my behavior

I'm not a man. Once when I shot a squirrel I swore that I would

Never again. I gave up meat. The sight of blood make me sick.

I like flowers.

I'm not a man. I went to prison resisting the draft. I do not fight

when real men beat me up and call me a queer. I dislike violence. (133; 下線部筆者)

まるでポップソングのサビのような "I'm not a man" というリフレインが頻繁に登場し、文法は日常的言語で統一され、シンプルさの切れ味とともに、男性という制度に割り当てられた自分のはぐれ具合を皮肉っている。しかし自分がどのような人間であるのか、愚痴りつつも誇り高く吠える素晴らしい詩でもある。ビート世代の詩は一般的に短いだけでなく、感情の表出が豊かであるため多感な学生達には非常に効果的なテキストと考えられる。この詩にも、前掲のワーク・シートのようにたくさんの質問項目を作ることが可能であり、特に < Interpretive Question > においては、語り手の立場、気持ち、人間性、さらにはアイデンティティー・ポリ

ティクス等、たくさんの有意義な質問が可能となる。例えば、「なぜ語り手は、家族を養えないという理由から自らが“man”ではないと考えるのか」等、基本的な事柄から、何を質問しても立派に文学的なディスカッションが楽しめるテキストと言える。ここにおいては Work Sheet 1 と趣旨を少し変え、文芸創作的ワークシートを作ってみる。

Sample Work Sheet 2

<p>Question: Imitate the format of Harold Norse's "I'm Not a Man," and complete the poem.</p> <p>I'm not a _____. I _____.</p> <p>I _____.</p> <p>I'm not a _____. I _____.</p> <p>I _____.</p> <p>I'm not a _____. I _____.</p> <p>I _____.</p> <p>I'm not a _____. I _____.</p> <p>I _____.</p> <p>(Eisuke Kawada, 2017)</p>
--

ノースの詩の大胆なりフレインを模倣して、学生達に詩を発表してもらうことは大変有意義なクラスイベントになり、クラスの活性化にもつながるはずである。

もう一人のビート詩人アレン・ギンズバーク Allen Ginsberg の「アメリカ」を見てみよう。

America I've given you all and now I'm nothing.
 American two dollars and twenty seven cents January 17, 1956.
I can't stand my own mind.
 American when will we end the human war?
 Go fuck yourself with your atom bomb.
 I don't feel good don't bother me.
I won't write my poem till I'm in my right mind.
 ... (146; 下線部筆者)

このギンズバークの詩においては、アメリカという母国の民主主義、資本主義、と戦争に対する強い反感とアメリカへの愛情が自我の中で激しくゆれ動く。これはとても共感されやすいテーマでありながら、同時に、ギンズバークの自暴自棄な暴力性とナイーブなセンチメンタリティとの摩擦と揺れの感情が著しく表出している。両極を彷徨うギンズバークのアイロニカル

な感情は、肯定的な意味で学生達を大いに戸惑わせることだろう。四技能統合型の英語教育にこうしたビート系テキストが特に効果的であるのは、学生達が感情移入しやすいこと、シンプルであること、また、ビート詩人たちのライブ音源などを使ったリスニングが可能であるためである。つまりこれは、正確な事実確認としての読み、解釈、ライブ鑑賞をしながらのディスカッション、最後にはクリエイティブ・ライティングまでもが可能となる十全とした教材なのである。

また次に、ベトナム系アメリカ人のリン・ディン Linh Dinh の作品なども授業で扱いやすいテキストである。

A Moral Decision

A man found himself in the familiar position of being in love with two women at the same time. He was married to one of them and made the moral decision to remain faithful to his wife. He also trained himself to never think about the second woman, in an erotic way or otherwise. Occasionally, however, when he was slightly drunk or overly tired, he would think that the ideal solution would be for his wife to die a quick, violent death, so that he could consummate his love for the second woman within the context of matrimony, without being immoral in anyway. (83; 下線部筆者)

男女夫婦が設定となっている、現代の流行語である「ゲス男」の語りである。クラス・ディスカッションにおいては、旦那派と女性派に分けた、お互いの立場を擁護するスタイルのディベートは大いにクラスを盛り上げるはずである。こうした男女の間の問題を扱ったテキストは感情移入しやすく、誰もが参加可能な詩と言える。

また、一つのテーマに対して二つの詩を並べ、それらの差異を議論することもまた有効な学習方法になるはずである。アメリカの詩人ジョー・ブレナード Joe Brainard を見てみよう。

Death is a funny thing. Most people are afraid of it, and yet they don't even know what it is.

...

Death is many different things to many different people. I think it is safe to say, however, that most people don't like it.

Why?

Because they are afraid of it.

Why are they afraid of it?

Because they don't understand it.

...

Death has a very black reputation but, actually, to die is a perfectly normal thing to do.

And it's so wholesome: being a very important part of nature's big picture.

Trees die, don't they? And flowers?

I think it's always nice to know that you are not alone. Even in death.

Let's think about ants for a minute. Millions of ants die every day, and do we care? No. And I'm sure that ants feel the same way about us.

... (318-319; 下線部筆者)

ブレナードのこの詩は、誰もが目を背けたがる暗い死に対して、大胆に開き直り、真正面からそれと向き合うことでそれを諒解しようと懸命に戦う。私達が死に対して持つネガティブなイメージをそのリズムとユーモアで一気に笑いに転換してしまう素晴らしい詩である。対して、比較したいもう一つの詩はアメリカのラッパー・詩人トゥーパック・シャクール Tupac Shakur である。

When my heart can beat no more
I hope I die for a principle or a belief that
 I have lived for
I will die before my time because I already feel
 the shadow's depth
So much I wanted to accomplish before
 I reached my death
I have come to grips with the possibility and
 wiped the last tears from my eyes
I loved all who were positive in the event
of my demise

---2pac, 1992 (8)

こちらは90年代のアメリカで活躍したトゥーパックが21歳の時に書いた詩である。彼は90年代アメリカで起こった東西ギャング抗争の中、世界王者ボクサーのマイク・タイソンの試合観戦の帰りに銃撃され、25歳で亡くなっている。驚くべきは、死の四年前の21歳の時に彼は既に最後の時をこれほどまでに鮮明に幻視していたことだ。学生達とほぼ年齢が変わらない時に書き手が抱いたこの死の幻視と、ブレナードのそれを対比させ、その上で、両作者の語りの文法がどのように異なるのか、そして二人の死に対する物腰がどのように異なるのか、など両詩の様々な差異をめぐって Text Identification (事実確認) のレベルで学習するだけでも、ミラーが述べたように学生達はポエムの形や意味が創り出す異空間に簡単に連れ去られるはずである。そして解釈問題として、二人の詩人にとって死とはそれぞれどのような意味を成しているのか、そしてその差異は何を示すのか、等を考えグループでディカッションすることで、より正確にかつ深くテキストを読んでもらえるだろう。そして最終的なアウトプットとして、「死」をテーマに詩を書き、発表するという課題もまた有効だろう。

IV. 結び—文学的想像力・共感力はコミュニケーションの実践性を高める

本論は、読書離れの時代の英語の教室にて如何にして文学的効用を活用するのかを考えた。そして最終的に、大学英語におけるアメリカン・オルタナティヴ・ポエトリーの教育的効用をコロラリーとして提出した。

本論が主張したいのは、短く平易な英語で書かれたテキストを用いることを通じて、それらがつ様々な形やそれが創り出す世界を感じとり、それを平易な英語で質問・応答し合い、「うたごころ」を感じとるレベルまで教室で学習できるとすれば、こうした「ちょっとへん」なアメリカン・オルタナティヴ・ポエムの作品群を扱うことが大変有効であるということだ。まずは私達教員自身がこうした普段触れ合うことのない世界観に対して角度から異文化コミュニケーションを試みるのが、今後の大学英語の教育における文学的効果を活用する教授法の初期導入を有効なものにし、さらに実体的な成果を生むのだと本論は主張する。付け足せば、こうしたテキストを選ぶことは、英語の教室にエンターテインメントと活性化をもたらすことにもつながる。

このような学習方法を用いて他者・異文化に対する共感力を涵養していくことは、これまで大学英語の教育が掲げてきた実践的コミュニケーション技術の向上という目標を、文学的想像力を通して、さらに遠くまで到達・発展させることを可能にする。実用的英語の教室においても、文学的効用を活用する努力を通して、この現代のグローバル世界に旅立つ学生達が最も必要とする、異質な他（者）と共生・発展をしていくための実践的ツールとしての文学的想像力や行動力を育むことが可能になるのであり、それによって、より高い次元で大学英語の目標を達成することが可能になると本論は考える。

今後、本論において示した文学テキストとワーク・シートを大学英語の教室において実践し、学生の反応やその効果を実証するデータ採取を行い、本論で示した試論をさらに説得力のあるものにする予定である。

註

¹ 本論は、2017年6月17日に開催された関東英文学会（日本英文学会・関東支部）第14回（年度夏季大会）の英語教育部門シンポジウム「英語教育と文学教育のはざま」における、本論執筆者の口頭発表「『実践的ツールとしての文学的想像力・行動力の涵養』——英語教育の目標をさらに高い次元で達成する」を大幅な改稿したものである。

² 本論における「大学英語」というタームは、主に大学一年生と二年生を母集団とする教養課程の必修英語の授業を想定している。

³ 本稿の戦略がどれほど効果的であるのかを実証するためのデータの採取は、本稿における主旨ではないため、将来的に研究論文として発展させる際に行うこととする。

⁴ 平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁、平成28年）、11頁。

⁵ 平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁、平成28年）、11頁。

- ⁶ 平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)、11 頁。
- ⁷ 平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)、11 頁。
- ⁸ 平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)、19 頁。
- ⁹ 平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)、19 頁。
- ¹⁰ 平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)、28 頁。
- ¹¹ さらに、大学生というレベルで考えてみた場合、既に大学等に入学したものの、読書を楽しむ素養が備わっていない学生達は、文学系の教員が好む第一級のキャンオン作品——高度な英語処理能力が必要とされる文学作品——を薦めてしまったことで、石を舐めるような感覚を覚え、文学テキストから遠ざかってしまうという場合も想定されるだろう。
- ¹² 本論が考える英文学者達の想定する「正典的文学作品」というものが、本論で用いているような「英詩」ではなく小説を指すのではないかという見解も想定される。しかし詩は文学のれっきとした一形式であるだけでなく、ルーツであることから、英詩と文学作品を分けて考えることは逆に不自然だろう。例えば西洋文学のルーツとされる古代典ギリシア代表的文学作品『オデュッセイア』(B.C. 800-675) は詩的形式で書かれた抒情詩であり、いわゆる「文学作品」という語彙で想定される小説ジャンルは、その歴史的発展によって生まれた近代的産物なのである。英文学者達の述べる「文学作品」とは、「文学的な効果をもつ作品」という意味であり、「小説か英詩か」という形式やジャンルの区別をしたり、近代的小説ジャンルという意味で「文学作品」という表現を用いている訳ではないと考えるのが妥当だろう。逆に、英詩がいわゆる文学作品に含まれないことを説明ことは不可能だろう。

参考文献

- Brainard, Joe. "Death." *The Outlaw Bible of American Poetry*. Basic Books, 1999.
- Ginsberg, Allen. "America." *Collected Poems 1947-1980*. Harper Perennial, 1988.
- Kerouac, Jack. "SOME WESTERN HAIKUS." *Scattered Poems*. City Lights, 1971.
- Dinh, Linh. *Blood and Soap*. Seven Stories, 2004.
- Norse, Harold. "I'm Not a Man." *The Outlaw Bible of American Poetry*. Basic Books, 1999.
- Shakur, Tupac. "In the Event of My Demise." *The Outlaw Bible of American Poetry*. Basic Books, 1999.
- 佐々木徹 「今、日本で、英文学にどう取り組むか?」『教室の中の英文学』、日本英文学会(関東支部)編(研究社、2017年3月)、2-9頁。
- 斎藤兆史 「文学研究と語学学習——『ジェイン・エア』のバーサの表象に着目した授業案」『教室の中の英文学』、日本英文学会(関東支部)編(研究社、2017年3月)、30-38頁。
- ミラー、ヒリス(2002) 『文学の読み方』、馬場弘利訳(岩波書店、2008)。
- 原田範行 「英語力の不十分な学生に、文学テキストを使って教えるために」『教室の英文学』、日本英文学会(関東支部)編(研究社、2017年3月)、22-29頁。
- 山口志義夫訳 『現代語訳 本居宣長選集(四) 源氏物語玉の小櫛一物のあわれ論』(多摩通信社、2013年5月)、第一巻、第二巻。

平成 26 年度文部省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査報告書」(株式会社浜銀総合研究所、平成 27 年 3 月)

平成 27 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』(文化庁、平成 28 年)